



平成十八年二月二十日  
〒九三二〇八〇四  
高岡市閭屋町四十  
有限会社 沖商店発  
2016.2.21

TEL 〇七六〇二五二五五  
FAX 〇七六〇二五二五〇  
E-mail info@oki-shouten.com

いつもお世話になりありがとうございます。

『人は何の為にこの世の中へ生まれて来たのでしょうか』『人生の本来の目的は何なのでしょう』『そんなことを皆様と一緒に考え、お互いに意見を交換したい。』  
そんな思いで本通信をお届けしている次第です。  
どうか忌憚の無いご意見を寄せてください。

一年の初めに

新年あけましておめでとございます。  
昭和三十八年以来の豪雪、あるいはそれ以上と言われているこのたびの大雪で、各地から雪の被害が報告されていますが、私どもの住んでおります富山県も大雪にみまわれて、久しぶりに、遠い昔の子どものころに還ったような、懐かしい思いで新年を迎えました。  
今年一年が、皆様方・私たち、全員にとって有意義な年でありますようにお祈りいたします。  
昨年、私の人生にとって節目を感じた年でした。「何が」と言われても、これだということが思い当りませんでしたが、大雪の中、出かけることもない正月休み、ゆっくり昨年を振り返ってみますと、それは沖商店の営業方針の変更によるものだと気がつきました。

昭和三十五年、高校を卒業して直ぐ入社して以来四十五年間、沖商店の歩みは私の人生であり、私の生き様が沖商店の歴史そのものだという事を、今新たに確認しました。  
流通機構の変化の波にのまれ、旧態然とした御問屋・小売店は不要となり、その数は激減しました。今残っているのは、何か他にない特長を持ち、それなりに社会に貢献し、存在価値を認められている者だけです。そして吾が沖商店も特殊事情に護られて、今日何とか営業を続けさせて頂いております。  
しかし、社会の変化は止まることを知らず、さらにはそのスピードを増してきています。

私どものユニフォーム業界においても時代の波は

メーカー直売の傾向にあります。

その方法は、カタログブックやDVDを直接事業所に郵送したり、インターネット・ホームページを利用したりしていますが、今現在ではデメリットも大きく、まだ本格的に普及しているとは言えません。しかし、近い将来、メーカー直売の方法が主流になるのは火を見るより明らかであります。  
5〜6年前ごろから、私は沖商店の営業も段々やりに難くなり先細りになるだろうと覚悟していましたが、沖商店も他のまねの出来ないものを持っていました。ここ二十年くらいは頑張つて行く自信はありました。そのうち私が七十を過ぎて体力も気力も萎えてきたら、その時点で身売りするなり整理するなり考えようと思っていました。

長男は東京で所帯を持ちサラリーマンとして生活しておりましたし、長女は愛知県の鉄工所経営者の跡継ぎの下へ嫁ぎましたし、次女はホンダに勤めていましたし（昨年イギリスへ嫁いだのは第一二三号でご披露済み）、高校生だった三女だけが不確定でしたが、本人の継ぐ意思がよほど強ければ別ですが、私の方からもちかける気は毛頭ありませんでした（それは今でもですし、長男に対してもありません）。  
そのような情勢の中、一昨年の六月に突然長男が帰って来ました（第一二二号第二項でご披露済み）。何があつたのかは知りませんが、詮索したくもありません。なぜなら、帰って来るには帰って来るだけの理由が有ることだろうし、彼には彼の人生と考える方があり、自己責任において彼なりの人生を亘つて行くべきだ（行つて欲しい）と思うからです。

とは言え沖商店の後継者が現れたことですから、私としては、吾が沖一族が先祖から受け継いで来た商家『沖商店』の火を私の代で消すことなく、無事バトンタッチして行けることであり、ありがたいことだと思っております。通常、永く続いた商家では、本人の希望を曲げてでも、家業を継がせる風習がありますが、このたびの場合は、私が子どもに強制することなく、本人が自ら望んで沖商店を継ぐことになり、私にとって、そのあまりにも都合の良い出来事に、私自身が嬉しいと言つより驚いています。  
これも私が常々申し上げている『眼に見えない力』の賜物ではないかと感謝している次第です。

これで、将来、発展性の少ない小企業を継いだ者として受ける苦勞に対しても、誰の所為でもなく自分の選んだ道であり、愚痴や後悔をすることなく頑

張つて行けることでしょう（そうあつて欲しい）。

というわけで、一昨年の六月に突然長男が帰つて来までの私の心境は、彼の帰郷で一八〇度変りました。沖商店の経営方針も消極的守勢から積極的攻勢に転じ、規模はそんなに大きくなくても、立派に存続して行くべく、前向きな姿勢で取り組まなければならないと思ひました。かたや、長男に沖商店の後継者としての色んな心得を教えなければなりません。  
それで、昨年一年に、何となく気づかないままに節目を感じたのだろうと思ひます。

神様が「まだまだ楽にはさせんぞ。もうひと苦勞（修行）してもらおうか」と言っているような気がします。今年の三月三十一日で満六十四歳、七十歳までは頑張りたい（修行を続けたい）と思ひます。

二 沖家の商い事始

前項で、商家『沖商店』という語句が出てきましたので、ここでついでに我が家の商い事始をご披露いたしましたしよ。

商いを始めたのは、私どもの祖父で沖磯次郎と言います。日露戦争は万龍山の戦いで片足を失い、それまで営んできた百姓ができなくなりました。それで百姓仕事を弟に任せ、自分は織機を買つて当時のもつともポピュラーな作業服生地・木綿紬の製造販売を始めました。年代は定かではありませんが、明治三十八年ではなからうかということですが、その後、取扱ひ品は色々変りましたが、繊維に関わつたものばかりで、第二次大戦中は軍服も縫製していたそうです。

戦後の動乱期を経て、昭和二十七年九月に今現在の組織、有限会社沖商店が設立されました。（代表取締役は三代目・沖外夫）。  
初代は磯次郎、二代目は長男・幸林、三代目は三男・外夫、四代目は幸林の長男・伊三、そして二代目・幸林の三男、四代目・伊三の弟、かく言う私奴が五代目ということになるわけでございます。

私の息子が昨年「明治三十八年に『沖商店』の商い事始がされたのなら、今年はずいぶと創業百周年になりますね」と言っていました。  
今や親子四代に亘らんとする商家『沖商店』が、小なりと言えどその存在価値を認められ、社会のお役に立ち末永く存続し、より多くの人々に「仕事を通じて己を磨く」という経営理念を理解させることができますようにと、今は亡き、初代目、二代目、三代目の先祖に祈りを捧げる毎日です。

三 楽は苦の種・苦は楽の種

正月五日午後七時半、NHK第一放送で、大自然スペシャル「幻の黄金クワガタを追う」と題してマレーシアの熱帯雨林の巨大昆虫たちの生態が放映されていました。

その一シーンにうつぶさず（虫を採る草）の壺の中（昆虫も溶かすほどの液の中）で生き抜く「ぼーふら」が紹介されました。

それを見て「地球の海底火山の火口から出る硫酸の中でなければ生きられない魚」とか「森林火災の跡、焼け跡の土に芽を吹く植物」火災に遭わなければ種子が弾けないので着地して発芽できない植物」というのを他の番組で見たことを思い出しました。  
チューリップや梅も零下の冷たい空気に遭わせないと花を咲かせる成分ができず、葉だけがのびて花が咲かないそうです。反対にチューリップの球根を冷蔵庫の冷凍室に数日入れてから、暖かい部屋で育てると正月に花を見ることが出来るので、そんなふうにして贈答用に用いられたりもしています。

このように火事に遭わなければ発芽しないと、寒さに遭わなければ開花しないと、即ち、ひどい目にあわなければ子孫を残せない、苦に遭つてこそその目的が達せられる、という物事が自然界には多く存在します。

何かの目的があり、それを達成するために苦勞がある（苦勞をする）。そしてその苦勞の先に勝利があり、目的が達成されるのであつて、その苦勞を乗り越えなくては絶対に目的が達成されない。  
私たちの人生において、苦しいこと辛いことが多くありますが、それを忌み嫌いそれから逃げるのではなく、神・仏の試練と受けとめ、前向きに努力し、苦を乗り越えた先に必ず楽（自分がこの世に生まれてきた目的の達成）があることを信じて、魂を磨いて行きたいと存じます。また、物事が順調に運んでいる時は、それに甘んずることなく、これもまた油断・驕慢への神・仏の試練と受け取り、心を引き締めなければならぬと思ひます。

まさに『楽は苦の種・苦は楽の種』、苦に際し楽に際し、自力の拙さやそれに頼ろうとする愚かさ、目に見えない他力の偉大さを悟り、実感して、日々修行に励んで行きたいと思ひます。

有限会社 沖商店 代表取締役 沖昌弘

個人メール E-mail 06252526@oki-shouten.com  
（にこにこ通信への意見をはじめる個人的な連絡は必ず個人メールへ）